

百人一首で有名な小倉山、嵐山から大堰川を1～2km遡った右側の山です。紅葉が美しく、藤原定家も「小倉山しぐるる頃のあさなゆうな昨日はうすき四方のもみじ葉」と詠んでいます。ところで、照り映える紅葉の山の向こう側は、あだし野（化野、仇野）と称される、名も無き骸が棄て置かれる葬送地でした。最近では化野念仏寺の無縁仏や千灯供養で有名な観光地です。

京都の歴史的三大墓地と云えば、東の^{とりべ}鳥辺山（鳥辺野）、西のあだし野、北の^{れんだい}蓮台野です。鳥辺山は清水寺の麓、現在の東山大谷廟一帯ですね。蓮台野は都造営の起点・船岡山の西側で上品蓮台寺はその中央になります。こうした墓地は冥界（あの世）との接点と云えるでしょう。

冥界では地獄の閻魔王が亡者の審判を行います。この閻魔王と談判して、罪軽き人ならばこの世に蘇生させるという超人が居ました。その人の名は、^{おののたかむら}小野篁と申します。

冥界には亡者の罪を裁く10人の王が居ります。十王とは、秦広・初江・宋帝・五官・閻魔・変成・太山・平等・都市・五道転輪の各王のことで、閻魔様は5人目です。

亡者は冥府に入ると初七日に秦広王の裁きを受け、27日目に初江王、37日目には宋帝王、以下順次47日、57日（閻魔王）、67日、77日、100日、1周年と各王を回り、最後の五道転輪王に辿り着くのは3年目となります。かなり長い間、苦しまねばなりません。

いずれも娑婆で犯した罪の裁きを受け、そして来世の生所が定まります。こうした思想は平安時代後期から次第に発達して、地蔵信仰と結びついて中世以降は一般庶民の生活に深く密着するに至りました。それに伴い篁を冥官とする伝説が広がり、江戸時代の頃には閻魔像のあるところには篁の像があり、地蔵尊とともに墓守り寺にはなくてはならないものとなりました。確かに、閻魔堂があるような寺には必ず小野篁が居りますね。

篁は空海や最澄の後半生と重なる、9世紀前半の人です。記録によれば、身長は188cmの筋骨逞しい大男で、武芸百般に秀で、一方で歌や書も有能という文官でした。法律にも詳しく、政界の不正を告発する弾正台の次官や、役人の不正を正す^{かげゆし}勘解由使の長官も勤め上げています。今日の検察庁長官みたいなものではないでしょうか。そして遣唐副使となった折、上司の横暴を許さず、抵抗する姿勢を貫いたものですから、時の嵯峨上皇の怒りに触れて^{隠岐島へ流罪}となるのです。不正を許さぬ剛直な姿勢は、庶民にとってはケレン味の無い、小気味良いスター像と映ります。様々な逸話や評判が伝え継がれて、鎌倉期以降になっての異名「冥官」の所以と思われます。

昨今、陰陽師の安倍晴明が盛んにもはやされていますが、この小野篁も注目に値する人物だと思われます。何せ、あの世とこの世を自由自在に往来し、閻魔様と直談判できるのです。例えば鳥辺山からあの世に行って閻魔様と会い、帰りは化野に顔を出すことも出来るのですよ。

余談ながら、大津市や山科区あたりから京都市内へ来られる方は、まさに鳥辺山を経由しているのです。ましてや通勤する方もなりますと、毎日あの世とこの世とを行き来されているわけですから、小野篁も真っ青、これはもう並大抵のものではございませんね。（*_*）

最後の遣唐使

篁は、遣唐副使の時に大使である藤原常嗣と対立し、乗船を拒否したからという理由で隠岐島へ流罪となります。この時の遣唐使はまれにみる難産でしたが、以下のような顛末です。

大使・藤原常嗣、副使・小野篁らの遣唐使団は、暴風のため2年連続（承和3、4年；836、837）で渡唐に失敗しました。そして承和5年（838）にようやく成功しましたが、この時、副使の篁は病気と称して乗船しなかったのです。その理由は、藤原常嗣の横暴に異議を唱えたためでした。

2度目の失敗の折、常嗣の乗った船は少なからず損壊を受け修理後も水漏れの懸念がありました。難を怖れた常嗣は、その船と篁の乗る船との交換を朝廷に認めさせたのです。しかも、神託による占いの結果であるという理由も添えてありました。

篁は部下の危険を顧みない、上司の横暴を咎める決意をし、批判は遣唐使制度そのものに及びました。篁を可愛がっていた嵯峨上皇もさすがに看過できず、極刑の遠流となったのです。

「わたの原^{やす}八十島かけてこぎ出でぬと人には告げよ^{あま}蟹（海人）

の釣り舟」と、難波津から舟で発つ時に詠んでおり、悲憤と別離の哀情を込めて「都の人には事のあらましを必ず伝えてくれよ」との意です。かの定家が“秀逸”と評した有名な一首ですね。

幸いにも1年有余で都への帰還が赦されており、理由は不詳ですが、召還後には参議・左大弁の顯職に就いたほどですから、よほど実力が買われていたと思われます。

さて、このいわくつきの遣唐使派遣でしたが、史上最後、17度目の遣唐使でもありました。前回は何と34年前（延暦23年；804）、最澄や空海が渡唐したことで有名です。当時の大使は常嗣の父・藤原葛野麻呂でありましたから、父子2代にわたる任命だったこととなりますね。

片や小野氏の方もそうそうたるものでして、推古朝最初の遣隋使・小野妹子を筆頭に、篁の曾祖父・毛野^{けぬ}は持統朝で遣新羅使となり、一族の小野滋野は遣唐判官、同時に小野石根^{いわね}は遣唐副使となっていて、小野氏一族は外交使節の任に当たった人を多く輩出しております。

小野篁の活躍した時代は、平安朝において国風文化が芽生え、醸成されていた時期なのです。唐文化への魅力が薄らぎ始めた時期といってもよいかも知れません。篁の遣唐使制度批判は、こうした背景も手伝ったのではないかと思います。そして平安京遷都からちょうど100年後の寛平6年（894）、大使に任ぜられた菅原道真の建議によって、遣唐使は廃止となります。

小野氏というのは、琵琶湖西岸の和邇^{わに}というあたりに地盤を持った、古代からの一族です。地元には、小野神社や小野篁神社、小野道風神社があります。篁の係累には著名人物が多く、篁自身も小野妹子（聖徳太子の命で遣隋使となる）の5代目の子孫なのです。小野道風（平安中期の能書家）は篁の孫で、小野小町も篁の孫ではないかとの説もあります。また、小野妹子の11世子孫が池坊専慶で立花を始め、現家元の専永氏は妹子44世の子孫となります。かような系統なので古代から現代まで、なかなかの華やかさではあります。

ところで、遣唐使を命ぜられた者は朝廷より新たに官位を授かったり、『^{ようじん}遙任』と呼ばれる、国司であっても現地赴任せず収入だけ得られる職を得ました。裏返せば、遣唐使という役目がそれほど危険極まりないものであったということですね。従いまして、遣唐使が任命された後最初に行なうことは、海路の平安を祈るため、「天神地祇」を祭ること（神頼み）でありました。荒れ狂う東シナ海を横断するにはそもそも船の構造（平底）に問題がありました。中国のジャンク船の構造を模したためですが、平底は荒海の航海には不向きです。加えて、天文観測技術や海洋地図、潮流の知識もかなり稚拙でしたから、運を天に任すしか無かったのです。

小野篁ゆかりの地

【^{ちんこう}珍皇寺（または^{ろくどう}六道寺）】東山区大和大路通四条下ル（建仁寺の南あたりです）

臨済宗建仁寺派。通常は「六道さん」と呼ばれており、毎年8月9、10の両日、精霊迎いの「六道まいり」が有名です。古くは鳥辺野の葬送地も広くて、この辺りもそうでした。門前の^{ろくろ}現町名は轆轤町だが旧名は^{どくろ}髑髏町で、いかにもいわくありげ。謡曲『^{ゆや}熊野』でも「愛宕の寺もうち過ぎぬ。六道の辻とかや。げにおそろしや。この道は冥途に通ふなるものを、こころ細そ、鳥辺山、煙のすえもうす霞む。」と謡われるように、門前の四辻を六道の辻と呼び、冥途と現世の分れ道です。境内には篁を祀る堂や閻魔堂があります。また、旅行ガイドに載る「子育て飴」の飴屋さんも門前にあります。なお、この近くには六波羅蜜寺（「蜜」の字に注目！「密」ではありません）があつて名残をとどめていますが、鎌倉時代に六波羅探題が置かれた所です。

【千本閻魔堂（正式名は^{いんじょう}引接寺）】上京区千本通蘆山寺上ル

船岡山の西南ですから、昔の蓮台野にあたりそうですね。

高野山真言宗。閻魔大王が本尊。小野篁の念持仏といわれる十一面観音や篁の木像も祀る。境内の狂言堂では毎年5月下旬に大念仏狂言が、観音堂（精霊堂）では毎年8月9、10の両日、^{うらぼんえ}盂蘭盆会（六道会）が行われ、参詣の人で賑う。精霊迎いの鐘つきで有名です。

なお、境内には紫式部供養塔という多層石塔があり、重要文化財に指定されています。

【小野篁の墓】北区堀川通北大路下ル西側

紫野西御所田町に、紫式部の墓と称する古塚と並んで小野篁の墓と称する古塚があります。南北朝時代に成立した源氏物語注釈本『河海抄』に、「式部ノ墓ハ雲林院ノ百毫院ノ南ニ在リ。小野篁ノ墓ノ西ナリ。」とあるので、これに基づいて江戸時代に或る有志が二人の墓を建立したらしい。残念ながら史実的にはかなり怪しいとされ、信用に足りないようである。とはいえ、江戸時代に刊行された『山州名跡志』には名所として紹介され、参る人も居たようです。

堀川通に面して碑柱があるとはいえ、うっかりすると通り過ぎてしまいそうな所です。